恋物語

一ノ瀬亜咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋物語

【Ｎコード】
Ｎ５１４４ＢＡ

【作者名】
一ノ瀬亜咲

【あらすじ】
「だから嫌いなんだ――……男子高校生は」
女子大学生・高屋美咲

「女全般、興味ないから」
男子高校生・御崎ルイ

互いに２度と会うつもりのなかった２人。
しかし意図せず繋がりが出来始め……

「お前、女嫌いはどこ行った？」

ふわふわ甘い恋物語。

0．プロローグ

【0．プロローグ】

私は男子高校生がきらいだ。

つい2・3年前まで授業や行事では頼り頼られ、人生の所謂青春時代をともに渡ってきた存在なのに。
ハイ出た年寄り発言――なんて今じゃお決まりの言葉を自らに浴びせ、1人苦笑する。

人間関係トラブルの80％は思い込みや勘違いが原因らしい。

例えば、背後にいる3人の男子高校生が私の耳元でゲラゲラ笑っていたとしても、彼等のなかの誰かが長年の片想いを実らせたことへの祝福ゆえかもしれないし、
傘を振り回した挙句私の肩にぶつかったとしても、部活の雨天中止のせいで体力が有り余っていたからかもしれないし、

「おいカズ、お前オネーサンに傘当たったぞー」
「うっわー最悪、マジ早く土下座しろって！！」

……こうやってヒトを勝手にネタにするのだって、話題が無くなりかけていた彼等のやむを得ない流れなのかも知れないのだ。

こんな日々見受けられる下らないと言えばその通りの出来事の積み重ね。
これを原因に不特定多数の“男子高校生”という存在を丸ごと嫌悪の対象にするなんて、彼等からしてみれば理不尽の極み。

そんなことは分かってる。でも。

「へ……あ、当たりましたか？大丈夫ですよ、ありがとうございます」

いや当たりましたけどね。

熟睡してても飛び起きるくらいの勢いでしたけども。

敢えての気付かなかった振り、加えて予想に反した感謝の言葉と適度に浮かべた笑顔。

一瞬ポカンと固まる。

しばらくして気まずさ半分恥じらい半分のよく分からない表情のまま、軽く会釈をしつつ顔を逸らす。

彼等のお決まりの反応だ。

煩わしい。

返事する度胸もない奴がヒトをしょうもない話題の種にするな。

作り笑顔に頬を染めるなガキんちょが。

1．初見

【1．初見】

「今日のご飯は……あ、ママ休みか。じゃあよろしくっと」

パチンッと携帯を閉じると、そのままバスの窓に目を向ける。
いつも見慣れた景色。
日が落ちたこの街は大学がある都心部と違って建物もさほど多くないし、街灯もやたらと設置されていない。
今日も星がきれいだ。

バスターミナル近くのファミレスでいつもどおり21時までのアルバイトを済ませると、息をつく間もなくバスに乗り込んだ私はグッと腕を伸ばした。
右も左もわからなかった大学生活も1年が過ぎ、1番楽ちんな大学2年生……か。

はじめは自分で1週間の時間割を作るってこと自体訳が分からなくて、別世界に入ってしまった感覚だった。私服を毎日選ぶことも、自分でお金を稼ぐことも。
だからなのかな。
高校の頃の自分達はもう大人だなんて態度が――酷く滑稽に見えてしまうのは。

重く感じてきた目蓋に素直に従い、うつらうつらしながらバスの心地よい揺れに身を任せる。
高校は自転車通学だったために慣れなかったこの振動も、いまや浅い睡眠を促す導入剤になっているから不思議だ。

人間なんでも慣れってことなんだろうな。
今自分が芯にしている、信念さえも。

「あーもう着いちゃった～。なんか今日はやけに早くねッスか？」

決して広くはないバス内に、その声は響いた。

「そりゃ今日乗った停留所が学園前だったからだろ。お前はとっとと降りろ大型犬」
「陽輔！　陽輔冷たい！！　ゲンさ～ん……陽輔やっぱ怒ってるよお～」
「ははは。そりゃぁ試合中に熱烈キッスをかまされちゃーなぁ」
「あれは事故じゃんかぁ！！　わざとじゃないしーちゃんと謝ったしーみんなにも説明したでしょー！？」
「うぜぇ。声でけぇ。いいから消えろ。そして1週間俺の半径３０メートル以内に入るな潰すぞ」
「う……そんな刺々しい君にフォーリンラブ」
「陽輔もシャイなんだから～あ、じゃあなルイ！　明日も寝坊すんなよー」
「くたばれ。２人ともくたばれ」

……

なんだ、アレは。

襲ってきていた眠りを一掃して――正確には邪魔してくれたのは、元気が有り余った様子の男子高校生3名の会話。なんて目覚めの悪

い。
最後尾の窓際に座っていた私は、彼らが気付かないことを前提にじとっと嫌な視線を送る。

五月蝿い。降りるならとっとと降りろガキ。
こっちは1秒でも早く家に帰ってレポート印刷しなくちゃいけないんだよゴルァ。

私は、どでかいエナメルバッグを抱えてバタバタと車内を駆けていくその1人になんとなく視線を馳せていた……が。
突然、運転手さんに定期券を見せていたその少年がこちらにグルッと顔を向けてきたことに、私は肩を小さく揺らした。

はー…危ない危ない。
思いっ切りガンつけてる表情を見られるとこだったよ、私。

まあ当然、少年も私に視線を向けた訳じゃない。
先ほどまで小規模な漫才を繰り広げていた2人に「そんじゃお疲れっしたー！」と別れの挨拶を交わしただけなのだが。

癖のついた茶髪に長身。着崩した制服、愛想のいい振る舞い。
ああ、さぞおモテになるんでしょうね。

それが、大型犬と呼ばれた彼の第一印象だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5144ba/

恋物語

2012年1月14日09時47分発行